

Title	著者リプライ
Sub Title	
Author	山本, 直子(Yamamoto, Naoko)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2025
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.30 (2025. 7) ,p.112- 113
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20250701-0112

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

著者リプライ

山本 直子

中村翔氏による丁寧な書評に、心より感謝申し上げる。拙著『「多文化共生」言説を問直す』に対し、批判的かつ建設的な視点から論じていただいたことは、著者としてこの上ない喜びである。以下では、中村氏が提示された論点のうち、とりわけ「差異の承認と権力関係」、および「社会統合の再考」に関するご指摘に応答し、いくつかの補足的な見解を述べさせていただきたい。

第一に、中村氏が指摘された、「移民の差異や強みの承認が『わたしたち日本人』に委ねられている」という構造的な非対称性についてである。ご指摘のとおり、拙著で描いた在日日系ブラジル人第二世代の語りや実践が、たとえそれが主体的で戦略的であったとしても、社会的に承認されるか否かは、やはりホスト社会の価値基準に依存してしまう傾向がある。「エンパワーメント」として描かれる行為ですら、非対称的な権力構造のなかで評価される。こうした構図を完全に解体することは困難であるが、それを可視化し、批判的に問うことこそ、本書の企図した「オルタナティブとしての多文化共生」の出発点であった。その意味で、中村氏が述べられたように、「日本人／外国人」という二項対立そのものを攪乱しうる存在として、第二世代の実践を捉え直す視座は、まさに拙著の主張と深く呼応するものであり、大いに勇気づけられた。多文化共生施策がしばしば「支援」という語を通じて実装される際、その根底には「支援する側／される側」という非対称な関係性が内在している。この構造は、たとえ施策が善意から発せられていたとしても、移民当事者の主体性や文化的実践を「支援されるべきもの」「調整すべきもの」とみなすまなざしを再生産してしまう危険を孕んでいる。拙著では、このような支援の逆機能として、たとえば「取り出し支援」が結果的に社会的な孤立やスティグマの内面化をもたらす過程を示したが、それは制度の設計や運用における「差異の管理」あるいは「正常性の規定」といった無意識的な権力の作用を明らかにする試みでもあった。中村氏が述べるように、たとえ第二世代の若者たちが自身の文化的・言語的背景をポジティブに語り直す実践を行ったとしても、それが「承認」されるか否かは、最終的にホスト社会の規範的価値観に依存してしまうという構造は否定できない。このことは、「差異の承認」が真に平等な関係性のもとでなされているわけではなく、むしろそれがホスト社会側の裁量に委ねられている限りにおいて、「共生」はつねに条件付きであることを示している。拙著で示した「オルタナティブとしての多文化共生」とは、まさにこのような承認の非対称性に抗う理論的実践への試みでもあった。評者が提示された「日本人の優越性を攪乱する潜勢力としての第二世代の語り」という視点は、本書の議論をさらに深化させるものであり、今後の研究においても重要な理論的鍵となると思われる。著者としても引き続き考えていくべき視点をご指摘いただいた。

次に第二点目として、中村氏が提起された「社会統合」概念の再考の必要性について述べたい。本

書において筆者は「社会統合」という語を繰り返し用いたが、それはこの語が現在の移民政策や多文化共生施策において、無自覚にある種の規範を押し付ける装置として機能している現状に対する問題提起の意図を込めていた。中村氏が紹介された Spencer and Charsley (2021) および Schinkel (2018) の議論が示すように、「統合」は、しばしば「同化」の婉曲表現として使われるだけでなく、あらかじめ「統合されるべき」他者を前提としている点で構造的な排除を内包している。本書は、これらと同様の視点を共有しており、これは、本書第5章で取り上げたように、「グローバル人材」という言説が持つ両義性とも密接に関係している。つまり、「多様性」や「ハイブリディティ」が評価される一方で、それはあくまで「人材」としての経済的価値や言語的資本を有していることが前提となっており、それに満たない者は「統合」の枠組みからこぼれ落ちていくのである。中村氏がご自身の専門領域である入管収容問題に即して述べられたように、こうした「人材化される移民」という前提は、実際の施策や制度の中で選別主義的に作用し、「非正規滞在者」や「無国籍者」など、制度から零れ落ちてしまう存在を不可視化してしまう。それゆえにこそ、「統合」や「共生」を語る際には、それが誰の視点から、誰に向けて語られているのかを問い直す必要があるといえる。拙著における議論は、その第一歩として、現場に根ざした語りを通じて制度的・言説的権力を可視化しようとするものであった。まだ十分に可視化できなかったものもあるが、「人材化されること」が共生の前提条件とされるような状況は、制度的・文化的排除の温床となり得るものと考えている。

他方で、このような排除の構造を問題化しつつも、本書では第二世代の若者たちが自身の経験やアイデンティティを戦略的に活用し、限定された機会の中で主体的に道を切り拓いていく姿にも注目した。それは「解放された主体」としての理想像を描くためではなく、現実の制約のなかで、ある種の苦し紛れの戦術として、彼ら／彼女らがいかにして「共生」の言説に内在する不平等や排除と交渉し、利用しながら、境界を問い直す可能性を模索しているかを描きたかったためである。

最後に、中村氏も指摘くださったように、本書の価値は「善意の共生」や「寛容な支援」の物語ではなく、むしろそこに潜む構造的排除を可視化し、問い直す点にある。その意味で、本書は「移民をどう受け入れるか」という視点ではなく、「私たちはいかなる社会であろうとしているのか」「共に生きるとは何を意味するのか」という根本的な問いを、読者に突きつけることを目的としている。本書が提示した議論の限界を認識しつつも、それが多文化共生や移民政策の新たな地平を切り開くための一助となることを願っている。中村氏の書評は、まさにその可能性を拓くものであり、拙著の議論をさらに深化させる貴重な視座を提供していただいた。今後もこうした対話を積み重ねていくことが、多文化共生の理念を再構築する方向に繋がると考えている。あらためて、中村氏に深く感謝申し上げ、拙い応答ではあるが、本リプライを結びとさせていただきます。

(やまもと なおこ 東洋英和女学院大学国際社会学部)